江戸時代における朝鮮馬術の伝来と継承
ー藤森神社の駈馬神事を中心にー

李　燦雨*

The Inheritance of the Korean Traditional Equestrian Feats in Edo Era
– Focusing on Kakeumashinji of Fujinomori Shrine –

LEE Chanwoo *

1. はじめに

開港以来、西洋文物の積極的な導入による近代化は、アジア諸国の伝統的な武の文化（以下、武文化）を大きく委縮させ、戦後の経済成長戦略による産業化はそれをさらに加速させた。これは、韓国社会においても同様で、政府主導の国土開発計画や農村の現代化運動などの産業化・都市化政策により、韓国は経済的に急成長を遂げたが、その代償として多くの有形・無形文化遺産を失った。特に、実用性に基づき繁栄し外部との共有を拒む武の文化は記録も多くないため、その実用性が失われると急速に委縮しやすい。そのため、韓国では朝鮮の得意技と称されてきた弓術・馬術すら多くが途絶えてしまい、その詳細が伝わっていない。

一方、武科廃止以降韓国では失われた武文化の痕跡が、なぜか日本各地や特定の武道流派から見られることが指摘されている[6)]。日韓に跨る政治･経済･軍事・外交・文化の長い歴史から、その多様な伝播経路や経緯を否定することは困難であるが、これらの多くは豊臣秀吉の朝鮮出兵後悪化した朝鮮との関係回復を図った徳川政権による日韓交流、すなわち朝鮮通信使の招聘に徳川幕府が馬上才を正式に要請したことと深くかかわっていると考えられる。特に、本研究で取り扱う馬上才は朝鮮時代に伝来し継承されている点で注目される。

日韓交流を語るうえで欠かせない「朝鮮通信使」に関しては、儒学・仏教・書道・美術・工芸などを中心に数多くの研究が行われ、朝鮮時代における日韓交流が広く知られている。しかし、その内容の多くは朝鮮の「文」文化であり、朝鮮両班社会のもう一つの軸である武班（武士）が伝えた文化は、日本でも韓国でもほとんど知られていない。

そこで本稿は、日本に伝わった朝鮮の武文化のうち、かつて朝鮮の得意技として近隣国に知られていた馬上才が京都で伝承されていることに着目する。史料上確認されるもののその実態が失われてしまった馬上才だが、それが伝えられた日本で現在も守り伝えられているのは非常に興味深い。本稿では、藤森神社に伝わる朝鮮式曲馬である駈馬の実態を把握し、この 1 世紀の間に韓国でその姿を消した武文化の一端を明らかにする。

2. 朝鮮馬上才の伝来

鎖国時代と称される江戸時代においても、日本は中国・オランダとは通商国として、朝鮮・琉球とは通信国として外交関係を維持していた。当時江戸に入った外国使節は朝鮮通信使、琉球使節、オランダ商館長一行であったが、その中でも、1607 年から 1811 年まで約 200 年間 12 回にわたって大規模な国王の使節団が日本を訪問した朝鮮通信使が持つ意味は格別である[2)]。

この朝鮮通信使の訪日で披露された馬上才とは、馬上、すなわち馬に乗りながら振るう才能、技芸をいい、その芸の絶妙さから馬戯、曲馬、猿馬、弄馬とも呼ばれた。本来の馬上才は、矢や銃弾が飛び散っている戦場で馬に身を隠しながら敵陣へ突入する体術として、撃球は馬上での武器の自由な扱いを身に付けるため考案・奨励されたものである[7)]。

朝鮮時代においても撃球、騎射と共に盛行した馬上才は、特に文禄・慶長の役の際に威力を発揮したことから[12)]、児童にもその練習を奨励したり[1)]、観武才[注 1)]の科目として採択したり[1)]、武芸教練書と

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

して作られた『武芸図譜通志』にも一つの武芸として位置づけられているなど、軍事武芸として重要な位置を占めていた。

表1で見るよう、日本で馬上才が初披露されたのは、文禄・慶長の役の戦後処理を務めていた「回答兼刷還使」が、「信（信義）」を「通す」使節団という意味の「朝鮮通信使」となった第4回目の訪日の1年前である1635年である。対馬藩主の依頼を受け、張孝仁と金貞が八重洲河岸で初公演を行って以来[17]、馬上才は日本各地から注目を浴びるようになった。この時期から幕府の要請を受け朝鮮通信使が訪日するたびに馬上才の公演が行われるようになり、第6回目の訪日を除き通信使が江戸まで行った最後の訪日である第11回まで馬上才は毎回行われるようになった。第6回目の訪日の場合も、日本は馬上才公演が行われると思っていた[11]。表2の通信使一行の編制や日本側の接待からも朝鮮通信使における馬上才の重要性が窺える。

表1 朝鮮通信使の馬上才年表*

回数	年代	使命	人数	馬上才員	特徴
1	1607	回答兼刷還	504		
2	1617	回答兼刷還	428		京都伏見まで訪問
3	1624	回答兼刷還・3代将軍家光繼承祝賀	460		鳥銃購入
	1635	馬上才公演		金貞 張孝仁	初馬上才公演
4	1636	太平聖代祝賀	478	白天龍 崔貴賢	馬上才，射芸 日光山遊覧
5	1643	家綱誕生祝賀	477	方繼男 姜承喜	馬上才 日光山遊覧
6	1655	4代将軍家綱繼承祝賀	485		射芸
7	1682	5代将軍綱吉繼承祝賀	473	吳順伯 刑時挺	馬上才
8	1711	6代将軍家宣繼承祝賀	500	池起澤 姜相周（李斗興）	馬上才
9	1719	8代将軍吉宗繼承祝賀	475	姜相周 沈重雲	馬上才，射芸
10	1748	9代将軍家重繼承祝賀	475	印文調 李世蕃	馬上才，射芸
11	1763	10代将軍家治繼承祝賀	477	朴聖抽 鄭道行	馬上才，射芸
12	1811	11代将軍家斉繼承祝賀	328		対馬まで訪問

*通信使謄録、徳川実記参照

3. 藤森神社と駈馬神事

京都府京都市伏見区に所在する藤森神社は、その創設年代は不明であるが、深草郷内にあった真幡寸神社、藤尾社、塚本社の三社が合社し現在の神社になったとされている[16]。また、神功皇后が摂政3（203）年新羅遠征から凱旋し軍旗と武具を奉納し、弓道の秘伝である弓矢蟇目の法を修して神々を祀られたのがその起こりと言われ、延暦13（794）には桓武天皇から「弓兵政所」と称されており[18]、現在も神武天皇・神功皇后・日本武尊・武内宿禰などを祀るなど、藤森神社は皇室や武家と関わりが深い[11]。

藤森神社では毎年5月5日に藤森祭という祭りが行われている。この藤森祭は大きく神輿巡行である神幸祭、馬の神事を奉納する駈馬神事、鼓笛隊と共に弓鎧行装して郷を巡行する武者行列で成り立っている。このうち騎馬武者の勇壮な様子が見られる駈馬神事が菖蒲の節である端午に行われるので、菖蒲が尚武に、尚武が勝負に通じるということで、藤森神社は勝運の神様として信仰を集め、現在は乗馬関係者の参拝が多い[13]。

これまで、力動的な騎馬武者の勇壮な様子を描いた江戸初期の駈馬神事に関する記録画「藤森祭図巻」[15]「藤森神社祭礼絵巻」[13]「藤森祭絵巻」[14]から、駈馬神事は鎌倉時代の武家の競べ馬が継承されたものであると考えられてきた[5]。しかし、現在行われている駈馬は早馬ではなく、競べ馬とは異なる形をしている。

本来の駈馬は室町時代には衛門府出仕の武官により、江戸時代には伏見奉行所の衛士警固武士や各藩の馬術指南役が馬術を競い合う形式で行われたが、明治以降は藤森神社の氏子により行われている。また、駈馬神事は昭和58年に京都市無形民俗文化財（登録民3）に指定され、藤森神社駈馬会（現、藤森神社駈馬保存会）を中心に伝承している。

表2　朝鮮通信使一行の編制と接待序列*

序列	職責	人数	日本側接待担当	序列	職責	人数	日本側接待担当	序列	職責	人数	日本側接待担当
1	正使	1	三使	18	典樂	2	次官	35	沙工	24	中官
2	副使	1	三使	19	理馬	1	次官	36	形名手	2	中官
3	從事官	1	三使	20	伴貴	3	次官	37	纛手	2	中官
4	堂上官	2(1)	上上官	21	船將	3	次官	38	月刀手	4	中官
5	上通事	3	上判事	22	卜船將	3	中官	39	巡視旗手	6	中官
6	製述官	1	學士	23	陪小童	19	中官	40	令旗手	6	中官
7	良醫	1	上官	24	奴子	52	中官	41	清道旗手	6	中官
8	次上通事	2	上官	25	小通事	10	中官	42	三枝槍手	6	中官
9	押物官	3(1)	上官	26	導訓導	3	中官	43	馬上鼓手	6	中官
10	寫字官	2	上官	27	禮單直	1	中官	44	銅鼓手	6	中官
11	醫員	2	上官	28	廳直	3	中官	45	大鼓手	3	中官
12	怜員	1	上官	29	盤纏直	3	中官	46	三穴銃手	3	中官
13	子弟軍官	5	上官	30	使令	18	中官	47	細樂手	3	中官
14	軍官	12	上官	31	吹手	18	中官	48	錚手	3	中官
15	書記	3	上官	32	節鉞奉持	4	中官	49	風樂手	18	下官
16	別破陣	2	上官	33	砲手	6	中官	50	屠牛匠	1	下官
17	馬上才	2	次官	34	刀尺	7	中官	51	格軍	270	下官

＊増正交隣志参照

4. 駈馬神事の曲馬と武芸図譜通志の馬上才

江戸時代の駈馬神事では各藩の馬術指南により多様な曲馬が披露されたが、現在は藤下がり、手綱潜り、逆立ち、横乗り、一字書き、矢払い、逆乗りの7の技芸が伝承されている[3]。一部資料には1980年代に9種類の技芸が行われたと記されているが[4]、同資料の前後号には7種となっており、「馬事年史」の著者である大友源九郎も明治初期と昭和初期に8種の技芸を見たと述べていることから[10]、近代以降技芸の一部が断絶され現在は7種の技芸が伝わっていると考えられる。

このような駈馬の技芸は朝鮮の武芸書「武芸図譜通志」[7]に記されている朝鮮の馬上才と動作の形態や技芸の数から非常に類似したものであるとみられる。朝鮮曲馬が日本で見られるのは江戸時代以降であり、朝鮮通信使が伝えた馬上才が18世紀を前後して日本で盛行したことから[8,9]、駈馬は朝鮮から伝わった武文化である蓋然性が高いと思慮される。現在藤森神社に伝わる駈馬と武芸図譜通志の馬上才を比較したのが表3である。

5. おわりに

朝鮮の代表的な武文化の一つであった馬上才は、韓国では伝承が途絶えその実態が失われたが、日本

表3　藤森神社の駈馬と武芸図譜通志の馬上才の技芸比較

技芸の由來	藤森神社の駈馬		武芸図譜通志の馬上才	
	技芸	実演	技芸	実演
敵矢に当たったと見せかけて駈ける技	藤下がり		左右鐙裏藏身（障泥裏）	
敵矢の降りしきる中駈ける技	手綱潜り		左右超馬（左右七歩）	
敵前にて嘲りながら駈ける技	逆立ち（杉立ち）		馬上倒立	
敵に姿を隠して駈ける技	横乗り		横臥馬上佯死	
後方へ情報を送って駈ける技	一字書き		走馬立馬上	
敵矢を打払いながら駈ける技	矢払い		飛電繞斗勢	
敵の動静を見ながら駈ける技	逆乗り（地藏）		縱臥枕馬尾	
馬上で遠方の敵を見ながら駈ける技	立乗り	断絶	雙走馬立馬上	

では京都の藤森神社で駈馬神事として現在も引き継がれている。武神を祀る神社として古くから皇室や武家と深くかかわってきた京都の藤森神社では毎年5月5日に藤森祭が行われ、駈馬神事が奉納されている。この駈馬は鎌倉時代からの伝統であると考えられてきたが、実は朝鮮通信使に由来する文化である。藤森神社駈馬保存会が中心となって引き継がれている現在の駈馬の技芸は、いずれも朝鮮の武芸書である武芸図譜通志の技芸と一脈相通しており、その技芸の絶妙さから江戸時代から明治末期まで脚光を浴びた。

付　記

本研究の一部は、平成 25 年度筑波大学体育系研究プロジェクトの支援を受けて実施されたものである。また、本稿は拙作の原著論文の一部を修正したもので、駈馬の詳細については「拙論（2014）：日本の藤森神社に伝承する朝鮮の馬上才．韓国体育学会誌，53（4）：17−27」を参照されたい。

注　記

注 1）観武才とは、王の命令によって特別に実施される武科試験の一種である。朝鮮時代には定期試験である式年試以外に、非定期試験である観武才が数多く実施されている。

文　献

1） 朝鮮王朝実録　光海君日記 11（1619）年.
2） 朝鮮王朝実録　宣祖 28（1595）年.
3） 藤森神社駈馬保存會（2013）：藤森神社駈馬神事由來書.
4） 京都市文化観光資源保護財団（1985）：會報. No.50.
5） 京都市歴史資料館（2008 改修）：藤森神社駈馬. 映像作品 24.
6） 李燦雨（2014）：日本の藤森神社に伝承する朝鮮の馬上才．韓国体育学会誌，53（4）：17−27
7） 李德懋 · 朴齊家 · 白東修（1790）：武藝圖譜通志. 奎章閣所藏.
8） 長塚孝（2002）：日本の古代競馬．神奈川新聞社，横浜.
9） 日本馬博物館（2009）：馬のサーカス大曲馬.
10）大友源九郎（1985）：馬事年史．明治百年史嚴選. 原書房，東京.〔日本競馬會（1948）の復刊本〕
11）林復斎（1853 推定）：通航一覧．巻 91，26 丁.
12）柳成龍（1633）懲毖錄.
13）作者未詳〔元祿時代（1688−1704）推定〕：藤森神社祭礼絵巻．富山県大寶寺所藏.
14）作者未詳〔江戸前期（1650−1660）推定〕：藤森祭絵巻．岡山県林原美術館所藏.
15）作者未詳（江戸中期推定）：藤森祭図巻．大英博物館所藏.
16）創祀千八百年藤森神社編集部（2007）：創祀千八百年藤森神社．藤森神社.
17）上田正昭（2001）：善隣友好の史脈：こころの交流朝鮮通信使．京都文化博物館.
18）山崎闇齋（1671）：藤森弓兵政所記.